

第一章…雪明かりの密会、はだける浴衣と悪戯な吐息

「くふふつ、見て見て先生。あんなに雪が積もってるよ？　これなら、ちよつとくらの爆発音じゃ誰も気づかないかもね？」

真っ白な雪に包まれた山間に、ひっそりと佇む高級旅館。その玄関先に降り立った瞬間、ムツキは楽しそうにそんな物騒なことを口にした。

手に提げた小さなバッグには、いつものように特製の爆弾がぎっしりと詰まっている。普段の「便利屋68」の仕事なら、今頃隣でアルが「アウトローの嗜みよ」なんて言いながら、真っ赤な顔をして虚勢を張っているとところだろうけれど。

今日、この場所にいるのは、ムツキと先生——つまり、俺の二人だけだ。

「アルちゃんたちには悪いことしちゃったかな？　……なーんて、ムツキちゃんがそんなこと思うわけないじゃない。ねえ、先生？」

ムツキは俺の腕に、自分の細い腕を遠慮なく絡めてきた。



厚手のコート越しても伝わってくる、彼女の体温。そして、不自然なほどに柔らかく、大きな重みが俺の二の腕を圧迫する。小柄な彼女の身体には不釣り合いなほどに成長した、豊かな胸。それが密着するたびに、俺の理性が少しずつ削られていくのがわかった。

「そんなに顔を赤くしてどうしたの？　もしかして、ムツキちゃんと二人きりで旅行に来るのが、そんなに刺激的だった？」

覗き込むような仕草。ニヤニヤとした、すべてを見透かしたような小悪魔的な笑み。

ムツキは俺が困っているのを見るのが好きだ。アルの背伸びしたハツタリを煽り散らして楽しむように、俺が彼女の奔放さに振り回される姿を、彼女は何よりも好んでいる。

仲居さんに案内されて辿り着いた部屋は、最上階の角部屋だった。

静寂が支配する和室。畳の香りが鼻をくすぐり、窓の外にはライトアップされた雪景色が広がっている。

仲居さんがお茶を淹れて去っていくと、室内には急に濃密な空気が流れ始めた。

「わあ、広いね！ 先生、見て見て。このお布団、もう敷いてあるよ？ ふふっ、旅館の人も気が利くよね。先生がムツキちゃんに、あんなことやこんなことをしたくなっちゃうって、バレてるんじゃない？」

「……そんなわけないだろ」

「あはは、先生、声が震えてるよ？ ほら、そんなに固まってないで、まずは浴衣に着替えようよ。せっかくの温泉なんだからせ」

ムツキはそう言うのと、バッグを畳の上に放り出し、備え付けの浴衣を手を取った。

そして、俺の返事も待たずに、その場でコートを脱ぎ捨て、ブラウスのボタンに指をかける。

「ちよつと、ムツキ。着替えは脱衣所か、せめて俺が見てないところで……」

「えー？ 先生、今さら何を言ってるの？ ムツキちゃんのこと、今まで何度も見てるくせに。……それとも、眼鏡の裏でじっくり観察したいのかな？ 先生ってば、本当はそういうのが趣味なんだもんね」



いたずらっぽく片目を睨り、彼女はあえてゆっくりとボタンを外していく。

パチン、と小さな音が響くたびに、白い肌が露わになっていく。

彼女の細い肩、浮き出た鎖骨。そして、フロントホックのブラジャーに今にも弾けそうに収まっている、巨大な双丘。

ムツキは俺の視線を逸らさせないように、わざと胸を強調するようなポーズをとった。

「くふふ、先生の視線、すっごく熱いよ？ ほら、そんなにはーっとしてないで、先生も脱いで？ それとも、ムツキちゃんが脱がせてあげようか？」

彼女は下着姿のまま、俺の胸元に指を這わせた。

鼻先が触れそうなほどの至近距離。ムツキの甘い香りが、雪の冷たさを完全に消し去っていく。

彼女の指先が、俺のシャツの隙間から肌に触れる。その感触は驚くほど熱かった。

「……ムツキ」



「なあに？ 先生。……そんなに怖い顔しないで。今日は、誰にも邪魔されないので、特別な時間だよ？」

ムツキは俺の眼鏡を指先で少しだけずらし、その瞳の奥をじっと見つめてきた。

いつもの茶化すような表情の中に、一瞬だけ、捕食者のような、あるいは深い愛情を孕んだような、真剣な光が混じる。

だが、彼女はすぐにまた、ニヤリと口角を上げた。

「ほら、先生。浴衣、着せて？ ムツキちゃん、帯の結び方、よくわかんないんだよね。……先生が責任を持って、ムツキちゃんを綺麗にしてよ」

差し出された浴衣。

俺は震える手でそれを受け取り、彼女の小さな体に羽織らせる。

だが、その行為自体がさらなる試練だった。

浴衣を合わせようとすると、彼女の大きな胸が邪魔をして、どうしても肌と肌が触

れ合ってしまった。

ムツキはわざとらしく「ひゃっ」と声を上げ、俺の胸に体重を預けてきた。

「あはは、先生の手、すっごく震えてる。……ねえ、そんなにムツキちゃんの身体に触れるのが怖いのか？ それとも……楽しみすぎて、我慢できない？」

彼女の吐息が耳元を掠める。

浴衣の合わせ目から覗く、深い谷間。

帯を締めようと彼女の背中に腕を回せば、舌応なしに抱きしめるような形になる。

ムツキは俺の首筋に腕を回し、耳たぶを甘噛みした。

「先生……温泉に入る前から、こんなにドキドキさせてどうするつもり？ ムツキちゃん、のぼせちゃうかもよ？」

その声は、いつもの悪戯なトーンよりも、少しだけ低くて、湿っていた。

俺たちはまだ、温泉の脱衣所にすら辿り着いていない。

けれど、この部屋の温度は、外の雪をすべて溶かしてしまうほどに上がり続けていた。

「くふふ。……ねえ、先生。温泉に入る前に、ちょっとだけ……いいこと、しない？」

ムツキの瞳が、妖しく、そして愛おしげに揺れていた。

第二章…湯煙の誘惑、溢れる秘事と甘い滴

「あははっ、見て見て先生！ 湯気で真っ白。これじゃ、すぐ隣にいてもお互いの顔が見えないかもよ？」

貸し切りの露天風呂へと続く脱衣所。

先ほどまでの部屋での密やかな熱を帯びたまま、ムツキは軽い足取りで湯船へと向かっていく。

バスタオル一枚だけを体に巻き付けた彼女の姿は、あまりにも無防備で、そして煽情的

だった。

細い肩から伸びる白い腕、そしてタオルの上からでもはつきりと分かる、不自然なほどに大きく、重たげな胸の膨らみ。

外はしんしんと雪が降り積もり、冷たい空気が肌を刺すはずなのに、俺の身体は内側から焼き尽くされそうなほどに熱い。

「ほら、先生も早く入って？ それとも、ムツキちゃんの裸を外からじっくり観察したいのかな。……くふふ、眼鏡が曇っちゃって、何も見えないかもしれないけどね？」

ムツキは振り返り、ニヤリと小悪魔のような笑みを浮かべた。

彼女の手が、胸元を留めているタオルの端にかけられる。

指先がわずかに動いた瞬間、真っ白なタオルが重力に従ってハラリと足元に落ちた。

「……………」



息が止まった。

湯気に濡れ、しっとり光る白い肌。

小柄な体軀には不釣り合いなほど、たわわに実った果実のような双丘が、拘束から解き放たれてぶるんと大きく揺れる。

細い腰つきと、その先に広がる柔らかな曲線のコントラスト。

ムツキは隠そうともせず、むしろ俺の視線を楽しむように、ゆつくりとその肢体を湯船へと沈めていった。

「ふああ……極楽、極楽。……ねえ、何突っ立ってるの？ 先生が来ないと、ムツキちゃん寂しくて死んじゃうかもよ？」

冗談めかした口調。けれど、その瞳は熱っぽく俺を射抜いている。

俺は吸い寄せられるように、湯船へと足を踏み入れた。

熱い湯が身体を包み込む。けれど、それ以上に熱いのは、すぐ隣から伝わってくる彼女の体温だった。



ムツキは湯船の中で音を立てて近づいてくると、俺の腕にびたりと寄り添った。

お湯の浮力によって、彼女の巨大な胸がふわりと浮き上がり、俺の腕を包み込む。

濡れた肌の滑らかさと、その芯にある驚くほどの柔らかさ。

腕に伝わる重みが、現実のものとは思えないほど官能的だった。

「んっ……先生の身体、すごく熱い。お湯のせい？ それとも、ムツキちゃんのせい？」

彼女は俺の首筋に顔を寄せ、熱い吐息を吹きかける。

甘い、花の香りのようなムツキの匂いが、硫黄の香りを塗り替えていく。

俺はたまらず、彼女の肩を抱き寄せた。

華奢な骨格。けれど、手に触れる肉感はどこまでも豊潤だ。

「……ムツキ、そんなに煽るなよ」

「あはは、先生ってば余裕ないね？ でも、そういう困った顔、ムツキちゃん大好き。……
もっと、見せてほしいな」

ムツキの手が、俺の後頭部に回される。

そのまま、抗う隙も与えず、彼女の唇が俺の唇を塞いだ。

最初は、羽が触れるような軽いキス。

けれどすぐに、彼女の舌が隙間を割り込み、俺の口内を支配していく。

ちゅ、という濡れた音が静かな雪夜に響く。

ムツキの舌は驚くほど積極的で、絡み合うたびに俺の思考は真っ白に染まっていく。

「んむ……ふ、はあっ……」

唇が離れると、銀色の糸が二人の間に引かれた。

ムツキの瞳は潤み、頬は上気している。

いつも余裕たっぷりな彼女が、今は少しでも呼吸を乱している。そのギャップが、俺の欲望に火をつけた。

俺は堪えきれず、湯船の中で彼女の腰を抱き上げ、自分の膝の上に乗せた。

正面から向き合う形になり、彼女の豊かな胸が俺の胸板に押し潰される。

弾力のある肉が形を変え、密着する。
俺の手は、自然とその双丘へと伸びていた。

「あっ……ん、そこ……先生、激しい……」

片手では収まりきらないほどの質量。

指を沈ませると、どこまでも深く、吸い込まれるような柔らかさが指先を包む。

下から持ち上げるように揉みしだくと、ムツキは俺の肩に顔を埋め、くぐもった声を上げた。

「ふぁ……んっ、んうう……！ あ、は……すごい、先生の手……あつたかい。ムツキちゃん
の胸、そんなに気持ちいい？」

気持ちいいどころじゃない。

指の間から溢れ出す肉の感触。

先端にある尖りが、俺の手のひらにコリコリと触れるたび、ムツキの身体がビクンと跳

ねる。

俺は夢中で、その柔らかな果実を弄り回した。

右手で右の胸を鷲掴みにし、左手で左の胸を寄せる。

二つの大きな膨らみが中央で押し合わされ、深い、深い谷間が出来上がる。

「あはっ……んんっ、あ……っ！　だめ、そこ……そんなに強くされたら、ムツキちゃん、変になっちゃう……！！」

ムツキの腰が、俺の太ももの上で落ち着きなく動く。

湯船の中で、彼女の秘部が俺の肌を擦る。

熱い。熱くて、頭がおかしくなりそうだ。

俺は彼女の耳元に唇を寄せ、低く囁いた。

「……ムツキ、ここ、すごく硬くなってるよ」

「っ……！！　それは、先生が……そんなふうに、いじめるからでしょ……んっ、ああ……っ！」

俺は彼女の胸の先端を、親指と人差し指で挟み込み、優しく捻りあげた。

ムツキは背中を反らせ、細い喉を露わにする。

湯気の中に、彼女の甘い喘ぎ声が溶けていく。

ふと、ムツキがいたずらっぽいわい、けれどどこか熱を帯びた視線で俺を見つめてきた。

彼女は自分の胸を両手で支え、俺の口元へと差し出してきた。

「ねえ、先生……。そんなにムツキちゃんの胸が好きなら……。いいよ……。飲んでみて？」

「……………え？」

「くふふ、先生、顔が真っ赤……。ほら、赤ちゃんみたいにさ。ムツキちゃんが、たっぷり可愛がってあげるから……。んっ、ほら」

彼女は自分の胸をさらに強調するように押し出し、先端を俺の唇に押し当てた。

甘い誘惑。理性が完全に弾け飛ぶ音がした。



俺は導かれるように、その巨大な膨らみに顔を埋めた。

「ん……っ、ああ……！ んんうっ！」

乳輪のザラつき、そして先端の硬い突起を、舌で転がすように弄ぶ。

ムツキは俺の頭を抱え込み、自分の胸へと強く押し付けた。

鼻腔を占拠する、熱を帯びた肌の匂いと、微かなミルクのような甘い幻想。

俺が吸い付くたびに、彼女の喉からは甘ったるい声が漏れる。

「あ、は……っ。んんっ……ふふ、先生、上手……。そんなに吸われたら……中から何か、出ちやいそう……。あ、ああっ……！」

俺は彼女の期待に応えるように、さらに深く、強く吸い上げた。

口いっぱい広がる、柔らかすぎる肉の弾力。

まるで本当に、彼女の命を吸り上げているかのような錯覚に陥る。

ムツキは恍惚とした表情で、俺の髪を掻き乱した。



「んっ……ふあ……！ あ、先生……っ、ダメ、それ……っ。んううっ……！ ムツキちゃん、もう……我慢できない……」

彼女の指が、俺の背中に食い込む。

お湯の中で、彼女の身体が小刻みに震えているのが分かった。

俺は胸から口を離すと、今度はもう片方の胸を丹念に愛撫し、彼女の全身を熱狂へと叩き込んでいく。

「あ、はあ……っ、ん、んっ……！ ……ねえ、先生。お湯の中じゃ、もう足りないよ……」

ムツキは俺の首筋に額を預け、荒い息をつきながら囁いた。

濡れた長い髪が俺の肩に絡みつき、彼女の熱い吐息が直接肌に伝わってくる。

「……続きは、あのお布団の上でしよ？ 先生が、ムツキちゃんをどうしたかったのか……全部、教えてほしいな」

彼女はそう言うと、俺の唇に最後にもう一度だけ、深く、熱いキスを落としたり。

湯気の中に響く彼女の含み笑いは、これから始まる本当の宴を予感させていた。

俺たちは、どちらからともなく湯船を出た。

濡れたままの身体を拭く間も惜しむように、絡み合ったまま、あのお布団が待つ部屋へと向かう。

窓の外では、雪がさらに激しく降り始めていた。

けれど、この部屋の中は、どんな真夏よりも熱く、そして甘い地獄へと変わろうとしていた。

「くふふ、覚悟してね、先生？ 今夜のムツキちゃんは……とっても、わがままでよ」

彼女の不敵な笑みが、暗がりの部屋で美しく、そして残酷なほどに輝いていた。

第三章…蜜色の寢所、溢れる熱と小悪魔の奉仕

温泉の熱気を帯びたまま、俺たちは吸い込まれるように部屋の布団へと倒れ込んだ。

薄暗い室内。窓の外で吹き荒れる吹雪の音さえ、今の二人にとっては遠い世界の出来事のように思える。

シートの上に広がったムツキの長い髪が、雪の上に散った紅葉のように鮮やかだ。

はだけた浴衣の隙間から、湯上がりで桜色に染まった白い肌が惜しげもなく覗いている。

「くふふ……。ねえ、先生。そんなにじっと見つめて、何を考えてるの？ さっきの温泉だけじゃ、全然足りないって顔に書いてあるよ？」

ムツキは横たわったまま、俺の眼鏡を指先でクイと押し上げた。

悪戯っぽく細められた瞳。その奥には、獲物を追い詰めた肉食獣のような、艶やかな光が宿っている。



「先生ってば、本当はムツキちゃんに……もつと、めちゃくちやにされたいんでしょ？」

彼女は身を起こすと、跪くようにして俺の上に跨った。

ずり落ちた浴衣の襟元から、あの重たげな双丘がこぼれ落ちそうになる。

彼女の細い指が、俺の火照った身体をなぞり、ゆっくりと下へと這い降りていった。

「わあ……。ここ、さつきよりずっと元気になってる。先生、正直だね？ ムツキちゃんが優しく、可愛がってあげる……」

彼女の小さな手が、熱を帯びた俺の硬い芯を包み込む。

滑らかな掌が、吸い付くように上下に動く。

ムツキは俺の反応を楽しむように、わざと緩急をつけて、俺の理性をじわじわと削り取っていく。

「んっ……あは、すごい……。ドクドクしてるよ、先生。……ねえ、これ、爆発しちゃいそ

う？ ムツキちゃんの爆弾より、ずっと危険な香りがするね？」

彼女は上目遣いに俺を見つめ、ぷっくりとした唇を舌で湿らせた。

そして、おもむろに顔を近づけると、熱い吐息を直接そこへと吹きかける。

「ふーっ……。……。ふふ、びくってした。先生、可愛い……。……。じゃあ、次は……。ムツキちゃんのお口、使ってあげよっか？」

ムツキはそう言うと、迷うことなくその場所へと顔を埋めた。

「ん、んむ……。っ、ふう……。」

熱く、湿った口腔が、俺のすべてを包み込む。

舌先が繊細に、けれど大胆に這い回り、神経の集まる一点を執拗に攻め立てる。

鼻腔を突くのは、温泉の香りと、彼女特有の甘い匂い。

喉の奥まで深く、深く飲み込まれるたびに、俺の意識は快楽の泥濘へと沈んでいった。

「はあ……。んっ、じゅる……。んちゅ……」

ムツキは一度顔を上げ、銀色の糸を引きながら、満足げに微笑んだ。

頬を赤く染め、瞳を潤ませた彼女の表情は、いつもの小悪魔的な余裕を失い、一人の雌としての色香を放っている。

「先生……。まだ、行っちゃダメだよ？ だって……。ここ、まだ使ってないもん」

彼女は自分の浴衣を完全に脱ぎ捨てると、あの巨大な胸で、俺の硬直を挟み込んだ。

左右から押し寄せる、圧倒的な質量の肉感。

お湯の中で触れたときよりも、ずっと生々しく、柔らかい。

ムツキは自分の胸を両手で寄せ、俺の芯をその深い谷間の中に埋没させた。

「んっ……。あは、これ、すっごく気持ちいい……。ムツキちゃんの胸、先生のせいでこんなに熱くなっちゃった。……。ほら、もっと、ぐちゃぐちゃにして……。？」

彼女が腰を振るたびに、汗ばんだ肌が擦れ合い、ねっとりとした音が部屋に響く。

柔らかすぎる肉が、俺の楔を締め付け、蹂躪する。

ムツキは恍惚とした表情で、自分の胸が変形する様子をじっと見つめていた。

「あ、はあ……っ！ん、んん……っ！先生、すごい……、ムツキちゃんの中まで、響いてるよ……。あ、あぁっ……っ！」

彼女の甘い喘ぎ声が、俺の耳元で歌のように繰り返される。

俺はもう、我慢の限界だった。

彼女の細い腰を掴み、欲望のままに突き上げる。

「んっ……あ、は……っ！くる、くるよ……先生……っ！……いいよ、全部……ムツキちゃんに、出しちゃって……っ！」

彼女は俺の顔を自分の胸に強く押し付けた。



限界まで高まった熱が、一気に溢れ出す。

「……………つ、ふあああつ……………!?!?」

ムツキは俺のすべてを受け止めると、それを一口も残さず、自らの喉を鳴らして飲み込んでいった。

「……………ごくつ。ん……………、はあ……………」

彼女は唇を指で拭い、いたずらが成功した子供のような、それでいてひどく妖艶な笑みを浮かべた。

「ふふ、ごちそうさま。……………先生、すつごく美味しかったよ? ……ねえ、これでおしまいだなんて、思っていないよね?」

ムツキの瞳は、まだ全く枯れていなかった。



むしろ、今始まったばかりだと言わんばかりに、深い渴望を湛えていた。

「……次は、ムツキちゃんを、もつと……めちやくちやにして。……ね？ 先生」

彼女は俺の首筋に抱きつき、熱い吐息とともに、次の地獄へと俺を誘った。

第四章…限界突破の狂騒、零れる熱と重なる鼓動

「あはっ……、先生、もうそんな顔になっちゃうの？ まだ、始まったばかりなのに」

シートの上に乱れたムツキの髪が、熱を帯びた空気の中で踊っている。

先ほどまでのいたずらめいた笑みはどこへやら、彼女の瞳は熱く湿り、その奥には底知れない独占欲と期待が渦巻いていた。

部屋の温度は、外の吹雪を忘れさせるほどに跳ね上がっている。

ムツキはしなやかな肢体をくねらせ、再び俺の体にその圧倒的な質量の肉感を押し付け

てきた。

二つの豊かな果実が、俺の胸板の上で潰れ、形を変えていく。

「ねえ……。アルちゃんが知ったら、腰を抜かしちゃうかもね。……ムツキちゃんが、先生とこんな……。熱いことしてるなんて」

彼女は俺の耳元で、わざとらしく熱い吐息を吹きかける。

その声は震え、微かな喘ぎが混じっていた。

「……っ、ん、はあっ……。！ 先生の鼓動、さっきよりずっと早くなってるよ。ドクドク、ドクドク……。ムツキちゃんの背中まで響いてくるんだもん」

ムツキは自分の胸を両手で力強く寄せ、その深い谷間に俺の存在を閉じ込めた。

吸い付くような肌の感触と、それを超えて伝わってくる彼女の心臓の音。

彼女は自分の大きな胸をまるで武器のように使い、俺の理性を一欠片ずつ粉砕していく。

「あ、はあ……っ、んんっ……!! ……だめ、そこ……。先生の手、すごく熱い……。っ。ムツキちゃんの身体、溶かされちゃうよ……。っ？」

俺の手が彼女の腰を、そしてその上の柔らかな曲線を描く背中を這う。

指先が触れるたび、ムツキはビクンと小刻みに震え、俺の肩に顔を埋めて甘い悲鳴を上げた。

「んっ……ふああ……。っ！ あ、ああっ……。っ！ ……いいよ、もっと、強く……。っ。先生が……。ムツキちゃんを、めちやくちやにしたいつて思ってること……。全部、教えて……。っ！」

彼女の言葉が引き金だった。

俺は彼女を押し倒し、重なる。

ムツキは受け入れるように腕を広げ、俺の首筋に指を絡めた。

絡まり合う脚。混ざり合う吐息。

彼女の豊かな胸が、俺の体重でさらに深く、柔らかく押し潰される。



その弾力は、どんな爆発よりも強烈な衝撃を俺の脳に与えた。

「……………ん、んんっ……………、じゆる……………んちゅ……………」

何度も、何度も唇を重ねる。

ムツキの舌が俺の口内を荒らし、その積極性が俺の衝動をさらに加速させた。

彼女はもう、余裕を見せることも忘れて、ただ一人の少女として俺を求めていた。

「あ、はあ……………、先生……………っ！……………もう、我慢……………できないよ……………っ。ムツキちゃんの中に……………先生を、刻み込んで……………っ！」

彼女の秘めたる熱へと、俺はすべてを預けた。

突き抜けるような衝撃が二人を貫く。

「あ……………あ、あああっ……………！！んっ、んうううっ……………！！！」



ムツキは大きく目を見開き、そして恍惚とした表情で天井を見上げた。

繋がった場所から広がる熱は、もはや言葉では言い表せないほどに濃密で、狂おしい。

俺が腰を動かすたび、彼女の大きな胸が波打ち、波紋のように揺れる。

そのたびに、湿った肉の音が静寂な夜に鳴り響いた。

「んっ、は……！　すご、すごいよ、先生……っ！　……中まで、全部……先生の熱で、いっぱい……っ。あ、はああっ……！　くる、また……大きいのが、くるうっ……！」

彼女は俺の背中に爪を立て、必死にその快樂の荒波に耐えようとしている。

けれど、溢れ出す喜びは止まらない。

「あ、ああっ……！　……いいよ、先生……っ。ムツキちゃんを、壊すくらい……激しくして……っ！　先生の全部……ムツキちゃんが、全部、受け止めてあげるから……っ！」

極限まで高まった緊張感が、臨界点を超える。



俺は彼女の身体を壊さないように、けれど魂のすべてをぶつけるように、最後の―撃を叩き込んだ。

「――つ、はあああああつ！！」

「んっ……あ、は、ああああああつ！！」

二人の絶叫が重なり合い、雪夜の静寂を切り裂いた。

溢れ出す熱。止まらない鼓動。

ムツキは俺を抱きしめたまま、何度も、何度も、小さな痙攣を繰り返していた。

やがて、荒い呼吸だけが部屋に残された。

「……あは、は……。先生、すごかった……。ね……」

ムツキは潤んだ瞳で俺を見つめ、力なく笑った。

彼女の頬や胸元には、二人の情熱の証が白く、そして生々しく散っている。

彼女はその一つを指で掬い、愛おしそうに眺めた。

「……これ、ムツキちゃんが貰っちゃったんだね。……ねえ、先生。……ムツキちゃん、もう先生なしじゃ、いられなくなっちゃったかも……？」

悪戯っぽく、けれどどこか切実な響きを含んだその言葉。

ムツキは俺の胸に頭を預け、幸せそうに目を閉じた。

嵐のような時間は過ぎ去った。

けれど、まだ夜は終わらない。

雪明かりに照らされた二人の身体は、いつまでも熱を失うことはなかった。

第五章…溶け合う魂、雪解けの朝に刻む永遠

「くふふ……。ねえ、先生。そんなにぼーっとして、もうおねむかな？ ……それとも、さっ

きので腰が抜けちゃった？」

静まり返った寝室。

乱れたシーツの上で、ムツキは俺の胸元に指先でくるくると円を描きながら、茶化すように笑った。

温泉の熱と、先ほどまでの激しい交わりの余韻。

彼女の白い肌には、まだ微かに汗の滴が光り、そこから立ち上る甘い香りが、俺の脳を再び麻痺させていく。

「あはっ。……そんなことないって顔してるね？ ……でも、ここ。……ムツキちゃんのすぐ隣で、またこんなにな大きくなってるよ？」

彼女の指が、俺の熱を帯びた一点をそつとなぞる。

そのひんやりとした感触が、逆説的に俺の欲望を再点火させた。

ムツキは俺の顔を覗き込み、潤んだ瞳でニヤリと笑う。

いつも通りの不敵な、それでいてどこか熱に浮かされたような、小悪魔の顔。

「先生つてば、本当に欲しがりさんなんだから……。……。でも、いいよ。ムツキちゃんも、まだ……。全然、足りないもん」

ムツキは身を起こし、俺の上に再び跨った。

重力に従って、彼女のたわわな双丘がゆったりと揺れ、俺の視界を支配する。

さっきよりもずっと赤く、熱く染まったその果実は、触れずともその柔らかさが伝わってくるようだった。

「んっ……。あ、は……。……。ねえ、見て？ 先生のせいで、ここ……。こんなにピンピンになっちゃってるよ」

彼女は自分の胸を両手で持ち上げ、その先端を俺の唇に押し当てた。

熱い。そして、驚くほど硬い。

俺が堪らずそこを吸い上げると、ムツキは「びゃっ」と短い声を上げ、背中を大きく反らせた。



「あ、はあ……っ！ ん、んんうっ……！ ……だめ、そんなに急に……っ。んっ、じゅる……んちゅ……。ああ……すごい、吸い付く力が……さっきより、強くなってる……っ！」

ムツキは俺の頭を自分の胸へと強く押し付けた。

顔を埋め尽くすような、圧倒的な肉の弾力。

鼻腔をくすぐる彼女の体温と、皮膚の柔らかさ。

俺が夢中でその大きな膨らみを食んでいる間も、彼女は腰を落ち着きなく動かし、俺の芯を自分の秘部で擦り続けていた。

「ん、あ……っ！ あは、は……。……ねえ、先生。……もう、入れよっか。……今度は、さっきよりも……もっと、奥まで……。ムツキちゃんのこと、全部……壊すつもりで、きて……？」

彼女は自分から腰を浮かせ、俺の楔を導いていく。

濡れそぼった入り口が、熱い鉄棒をゆっくりと飲み込んでいく。

「んっ……あ、あああつ……!! ……ふああ、すごい……っ! あ、は……。 ……先生、すっごく、太いよ……。 ……中が、みっちり……。 ……埋まってる……。 ……っ」

ムツキは俺の肩に爪を立て、必死に呼吸を整えようとしていた。

けれど、繋がった場所から伝わってくる強烈な快楽が、彼女の冷静さを奪っていく。

俺は彼女の腰を掴み、下から突き上げた。

「ん、んっ……。 ……あ、ああっ……。 ……あは、はっ……。 ……すごい……。 ……っ! ……先生
の、そこ……。 ……ムツキちゃんの、一番大事なところに……。 ……ガツガツ当たって……。 ……っ! ……ん
んうっ……。 ……!!」

激しくぶつかり合う肉の音。

彼女の大きな胸が、衝撃のたびに激しく、そして無防備に揺れる。

俺はその双丘を鷲掴みにし、形が変わるほど強く揉みしだきながら、さらに腰の動きを速めた。



「あ、はあ……っ！ん、んっ……！！……いい、そこ……っ！……先生、もっど……っ！
……あ、あああつ……！！……ムツキちゃん、もう……頭の、中……真っ白になっ
ちやう……っ！！」

ムツキの瞳が虚ろになり、恍惚とした表情で天井を仰ぐ。

彼女の締まりは、二回目だというのにさらに増しているように感じられた。

吸い付くような粘膜の熱が、俺の理性を一気に限界へと押し上げる。

「あ、は……っ！……先生、すごい……、気持ちいい……っ！……ねえ、先生も……気
持ちいいでしょ？……ムツキちゃんの中、最高でしょ……っ！？」

彼女は激しく腰を振りながら、必死に愛の言葉を求めてくる。

俺は彼女を抱き寄せ、耳元でその答えを、言葉と身体の両方で伝えた。

「——っ！ん、んんうっ……！！……あは、ははっ……！！……あ、あああつ！！

……くる、くるよ……っ！ ……また、さつきより……もっと、すごい……っ！！」

ムツキの身体が弓なりに逸れる。

内壁が激しく脈打ち、俺の楔を握り潰さんばかりに締め付ける。
俺もまた、こらえ切れない熱を、彼女の最奥へと解き放った。

「っ……あ、あああああっ！！！！」

「んっ……ふあああああっ！！！！」

白濁した熱が、彼女の狭い産道を満たしていく。

ムツキは俺を強く、折れそうなほど抱きしめながら、そのすべてを飲み込んでいった。

「あ、はあ……っ。ん、んう……。ん……っ」

長い沈黙。

聞こえるのは、重なり合う二人の荒い呼吸と、窓の外で止んだ雪の静寂。

ムツキは俺の首筋に顔を埋めたまま、しばらくの間、余韻に震えていた。

やがて、彼女はゆっくりと顔を上げると、頬を赤らめ、少しだけ恥ずかしそうに、けれど最高に幸せそうな笑みを浮かべた。

「……………あは。……………先生、すつごく……………気持ちよかったね。……………ムツキちゃん、もう……………お腹の、中……………先生の熱で、ぼかぼかだよ……………」

彼女は俺の額に、自分の額をこつんと当てた。

「……………ねえ、先生。……………明日、アルちゃんたちのところに戻っても。……………このこと、内緒だよ？ ……二人だけの、特別な爆弾……………、にしておこうね？」

彼女はそう言うと、俺の唇に、今までで一番優しく、甘いキスを落とした。

窓の外では、夜明けの光が雪原を白く染め始めている。



けれど、この温もりだけは、永遠に溶けることはない。
俺とムツキの、特別すぎる一夜は、静かに、けれど熱烈に、その幕を閉じた。

「くふふ。……おやすみなさい、先生。……大好きだよ」

彼女の囁きは、春の訪れを告げる風のように、俺の心に深く、深く刻まれた。

エピローグ…解けない魔法、悪戯な恋心と終わらない熱

「くふふ……。ねえ、先生。そんなにぼーっとして、昨日のこと思い出してるの？ それとも、ムツキちゃんが隣にいないと、もう寂しくて死んじゃう身体になっちゃった？」

旅館からの帰り道、人目を盗んで滑り込んだ個室。

外の世界では「便利屋68」の日常が待っているけれど、扉一枚隔てたこの空間だけは、まだあの熱い夜の続きだった。



ムツキは悪戯っぽく笑いながら、俺の膝の上にひらりと飛び乗ってきた。

コートを脱ぎ捨てた彼女の身体からは、あの夜と同じ、甘くて蕩けるような香りが立ち上っている。

「先生ってば、眼鏡の奥の目がすっごくエッチだよ？ ……ねえ、ムツキちゃんのここ、また見たくなっただんでしょ？」

彼女はニヤニヤと笑いながら、薄手のブラウスのボタンを上から順に外していく。

一つ、また一つと弾けるたびに、白い肌と、それを覆いきれない黒いレースのブラジャーが露わになる。

そして、彼女がブラジャーのホックを外した瞬間。

小柄な身体には不釣り合いなほど、たわわに突った巨大な双丘が、重力に従ってぶるんと贅沢に跳ねた。

「あはっ、先生、息が止まってるよ？ ……そんなにムツキちゃんの胸、好きなんだ。……じゃあ、まずはこれで……もっと元気にさせてあげるね」

ムツキは俺の股間に跨ったまま、自分の大きな胸を両手で力一杯に寄せた。
深い、深すぎる谷間。

彼女はその肉の隙間に、俺の熱く昂った芯を挟み込む。

「んっ……あは、すご……。先生のここ、もうこんなに熱いよ？ ……ねえ、ムツキちゃんの胸で、ぐちゃぐちゃにされたい？」

彼女は腰を前後に揺らしながら、胸の肉で俺を締め付け、擦り上げた。

柔らかすぎる肉の弾力。

左右から押し寄せる圧倒的な質量が、俺の理性をじわじわと削り取っていく。

ムツキは俺の反応を楽しむように、わざと先端を俺の芯にコリコリと擦り付けた。

「んっ……ふあ……っ！ あ、は……。……先生、すごいよ……。ムツキちゃんの胸、先生のせいで……こんなに熱くて、ドクドクしてる……っ」



彼女の吐息が耳元を掠める。

俺は堪らず、彼女の豊かな胸に顔を埋め、その柔らかさに溺れた。
鼻腔を突く生々しい肌の匂い。

ムツキは俺の頭を抱き込み、さらに強く胸を押し付けてくる。

「あ、はあ……っ！ ん、んんっ……！！ ……いいよ、先生……。ムツキちゃんの胸、好き
きなだけ……めちやくちやにして……っ！ ……あ、ああっ……くる、くるうっ……！！」

彼女の胸が激しく波打ち、俺の顔を肉の海に沈める。

限界まで高まった熱が、彼女の胸の間で一気に溢れ出した。

「っ……あ、ああああっ……！！」

「んっ……ふああああ……っ！！ あは、は……すご……。ムツキちゃんの胸、先生ので……
真っ白になっちゃった……」

ムツキは自分の胸に散った情熱の証を見て、満足げに微笑んだ。



けれど、その瞳の奥の火は、まだ消えていない。
むしろ、今の衝撃がさらなる渴望を呼び覚ましたようだった。

「……ねえ、先生。……これだけで、満足したなんて言わせないよ？ ……ムツキちゃんの
下の方も……さつきから、先生を待つて……すつごく、熱くなってるんだもん」

彼女は濡れた胸をそのままに、俺のシャツを強引に脱がせると、再び俺を押し倒した。
重なり合う肌と肌。

彼女の秘部が、俺の太ももに熱く、湿った感触を伝えてくる。
俺は彼女の腰を掴み、その最奥へと一気に突き入れた。

「——っ！！ あ、あああああつ……！！」

ムツキは大きく背中を反らせ、喉を震わせて絶叫した。

二回目とは思えないほどの、鮮烈な締め付け。

彼女の内壁は、俺の侵入を狂おしいほどに歓迎し、逃がさないようにと強く絡みついて

くる。

「んっ……は、あ……！！……あは、は……っ！……先生、すごい……、すごいよお……っ！……中、まで……先生が、全部……入ってきてる……っ！！」

俺が腰を動かすたび、密着した彼女の大きな胸が、俺の胸板の上でぐちゃぐちゃに潰れる。肉と肉がぶつかり合う、湿った、淫らな音が部屋中に響き渡る。ムツキは恍惚とした表情で、俺の首筋に必死に吸い付いてきた。

「あ、はあ……っ！……ん、んんっ……！！……いい、そこ……っ！……先生、もっど……奥、突いて……っ！……ムツキちゃんの、中……全部、先生ので……壊して……っ！！」

彼女の言葉に煽られ、俺の動きはさらに荒々しく、激しくなっていく。

一突きごとに、ムツキは可愛らしい悲鳴を上げ、全身をビクンと跳ねさせた。

「んっ……ふああああっ……！！……あ、ああっ……！！……だめ、もう……ムツキちゃ

ん……イっちゃう……っ！ ……先生、一緒に……っ、一緒にイこ……っ！！」

彼女の締め付けが、限界を超えて強まる。

俺は彼女のすべてを奪い尽くすように、腰を深く、激しく叩きつけた。

「っ……！！ あ、あああああっ！！！」

「んっ……ふあああああっ！！！」

二人の魂が溶け合うような衝撃。

俺は彼女の最奥に、すべての熱を注ぎ込んだ。

ムツキは俺の背中に爪を立て、絶頂の波に身を任せながら、何度も、何度も、俺の名前を呼ぼうとして——けれど、言葉にならない甘い喘ぎ声だけを漏らした。

「……はあ、はあ……っ。ん……っ……」

やがて、静寂が戻ってくる。



ムツキは俺を抱きしめたまま、お腹の中に広がる熱を噛み締めるように、そっと目を閉じた。

「……………あは……………先生、最高だったよ……………ムツキちゃんの中、先生ので……………いっぱい……………もう、これ……………一生、抜けない魔法になっちゃえばいいのに……………」

彼女は俺の胸に顔を擦り付け、幸せそうに微笑んだ。

その顔は、いつもの小悪魔的な面影を残しながらも、愛する人にすべてを捧げた、一人の少女のものだった。

「……………ねえ……………これからも、ムツキちゃんのこと……………たくさん、可愛がってね？……………その代わり、ムツキちゃんも……………先生のこと、世界で一番……………めっちゃくちゃにしてあげるから……………」

外は冷たい風が吹いているかもしれない。

けれど、二人の心には、あの雪夜の温泉よりもずっと深く、消えることのない情熱が灯

り続けていた。

「くふふ。……約束だよ、先生」

ムツキはそう言うと、俺の腕の中で、安らかな、けれどどこか次の悪戯を企んでいるような寝顔を見せた。

二人の秘密の物語は、これからも、終わることなく続いていくのだ。

く完く

